Architectural Institute of Japan

5033

日本建築学会大会学術講演梗概集
（九　州）　1989 年 10 月

住生活の主体的形成に関する考察

正会員 ○ 在塚礼子

1．研究目的

住み手が自分らしい生活を送るには、それにふさわしい住まいをつくるための計画段階への参加とともに、住まいを住みこなすことが必要である。この過程を経て住まいが完成するとも言えよう。

本研究の目的は、この主体的な住生活形成の２つの局面、即ち、居住者が住まいづくりにいかにかかわり、現在いかに住みこなしているか、を把握することである。また、そのような住まいへのかかわり方をもたらしたものは何かについての簡単な分析を加えて、住まいの教育を考える手がかりともしたい。

住みこなすことを、具体的には、住要求の住み方へのあらわれとともに、住まいの中にどのような自分の“座”を持っているかを通して見ようとした。住みこなすとは、住まいにおける個人の領域の形成であり、その核に“座”があると考えることができ、また、居心地よい住まいの条件のひとつに、自分が落ち着く“座”とも言うべきものがあると考えたからである。かつて伝統住居において存在した“座”による安定した個人の居場所を、現在の住まいにおいては自らつくりあげることが必要であり、それを私室だけでなくだんらんの場の中にも持つことに意味があると考えた。従って本研究においては住生活の内容を、個人と家族の関係に中心を置いて捉えることになる。

2．研究方法

住まいづくりの過程が明確なコーポラティブ住宅の居住者を対象にアンケート調査を実施した。個人にかかわる内容については、夫と妻のそれぞれに調査票を用意した。世帯用は平面図と住み方、設計の分担など、夫／妻用は設計への配慮、こだわり、それらの意識をもたらしたもの、実現できなかった点、“座”の意識、場所と行為、管理などを内容とした。各戸配付、郵送回収。回収率は15%と低く、有効回答は20世帯であり、少数例に基づく試論の段階である。

3．計画へのかかわり方と住要求

＜計画へのかかわり方＞　計画段階での居住者のかかわり方は、大きくは、夫主導型（４例）、妻主導型（３例）、分担型（６例）、相談型（７例）の４タイプに分けられる。夫主導型は、夫が建築の専門家である場合が多く、ほとんどすべてを夫が決定している。分担型については、夫が設計組合会議に出席、妻が設計という場合と、夫が和室や主な設計、妻が居間や台所の設計という場合がある。しかし、記入された（意識された）計画意図にはかかわり方による差は見出せず、いずれにおいても、床の間をつくることへのこだわり、収納への配慮、広い居間への要求、個室や書斎の確保などが主要な内容である。

＜住戸平面と住まい方＞　このコーポラティブ住宅は142戸と集合規模が大きく、予め全体計画がなされ、住戸については標準設計が示されている。そこからの変更点および実際の住み方から、顕在化した住要求を

＜表１＞調査対象（20世帯）の概要

・調査対象　東京都住宅供給公社によるコーポラティブ住宅

・住戸タイプ　３ＬＤＫ相当（５）　４ＬＤＫ相当（12）　５ＬＤＫ相当（３）

・平均年令　夫 48.5歳　妻 44.5歳

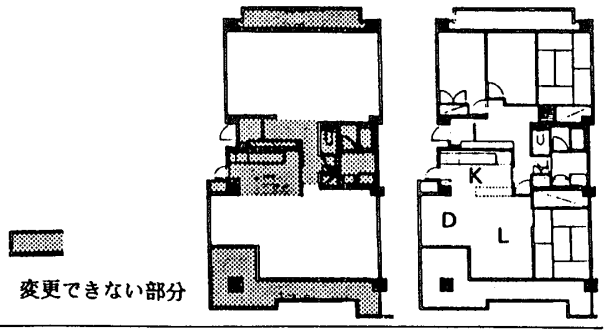
・職業　夫　会社員、公務員、他　妻　無職（85%）、他

・家族構成　夫婦のみ（４）　夫婦＋１子（１）　夫婦＋２子（13）　夫婦＋３子（２）

・入居年月　1984年３月～６月（18）　1985年３月～４月（２）

・調査年月　1988年11月

・住戸プラン（４ＬＤＫ相当）基本型　標準設計



Notes on self-formation of dwelling life

5033

ARIZUKA Reiko

NII-Electronic Library Service

Architectural Institute of Japan

読み取ることができる。床の間の設置、私室の洋室化、空間の拡がりまたは一体化、台所の分離などに対する志向性が読み取れる他、家族の共用空間と個人空間の多様なあり方が見出される　。これについては役割分担のタイプごとにいくつかの特徴がある（表２）。

4．“座”について

＜“座”の位置＞　まず、“座”と思える位置を平面図の中に記入してもらった。“自分の座はない”という１例を除いて、ひとり当たり１～３か所の“座”を記している。その場所は、夫13例、妻16例と、ともに過半が居間であり、具体的な位置として、居間のソファとしたのが夫、妻ともに８例だが、食卓のイスとしたのは妻の13例に対し、夫では４例に過ぎない。

＜“座”と行為＞　別の質問項目である６つの行為の位置との重なりからは、“座”と意識される場所には、手紙を書いたり、読書をする静かな個人的な場所（A）、新聞を読んだり、くつろいだりする気楽な場所（B）、接客の際の自分の位置（C）、の３つのやや異なる意味を持つ場所が挙げられていることがわかる（表３）。夫と妻ではそのあり様が異なる。夫については、かつての座敷における“座”に近い（A）＋（C）は２例と少なく、書斎的な（A）か居間にある（B）＋（C）という新たな“座”に集中が見られる。妻については（A）＋（B）＋（C）という極めて安定していると見られるあり様が12例にのぼり、その位置は居間のソファと食卓のイス（これも居間にある）が半数ずつである。

＜“座”の意識＞　そのような“座”については、ひとりの夫を除いて、気兼ねなく落ち着いていられる場所だと答えている。　自分以外の人がくるのはいやだというのは夫５例、妻２例であるが、夫の２例が専用の書斎である以外はすべて居間であり、居間の中にそのように意識される“座”が形成されていることになる。夫と妻の例は１組が重なっているのみである。

＜“座”の管理＞　自分の“座”を自分で管理し、掃除している夫は４例（内２例は掃除は妻も手伝う）、管理のみしている夫も４例である。８例中４例が専用私室である。また、（A）＋（B）＋（C）の“座”を持つ夫３例中２例、自分以外の人がくるのはいやだという夫５例中２例が自分で管理している。

一般的には“座”と意識されている場は、多くの行為の重なる安定した“座”であっても、空間的にも、意識の面でもオープンである。

5．住生活意識の明確化

計画意図や住み方については、家具や壁紙などのものに関することについては住宅誌・カタログ・ショールームなどの情報の影響、家族との住み方や住み方のマナーについては祖父母や父母、知人などの影響が強く、学校教育の影響は極めてわずかであり、住み手自身が最も影響を受けていると思うのは過去の居住体験であるとう。その中で、家族との住み方は微妙で多様であるにもかかわらず、このことに関する自らの住要求やその特徴は住み手自身には意識されていないことが多いことがわかった。この住生活意識とも呼ぶべき意識の明確化を促す住教育が必要であろう。

調査にご協力下さった居住者の皆様と、コープ住宅推進協議会の藤井淑子氏、調査研究の実施と集計、分析の協力者である1989年度埼玉大学卒業生、山下智子さんに厚く感謝いたします。

＜表２＞設計変更の主な特徴

特　　徴	夫主導型	妻主導型	分担型	相談型	計
1．改まった接客室（和室に床の間）を作る。	2例	2	6	1	11
2．和室を減らす。（1室のみにする。）	0	0	2	3	5
3．和室をなくす。	2	0	0	0	2
4．部屋の間仕切りをとる。	3	1	1	1	6
5．台所をオープン式にする。	2	1	2	2	7
〃　クローズド式にする。	2	2	4	5	13
6．作り付け収納家具を設定する。収納工夫。	3	3	2	2	10
型別　事例全体数	4	3	6	7	20

＜表３＞“座における行為の重なり

	夫	妻
手紙・読書（A）	5	6
新聞・くつろぐ（B）	1	0
接客（C）	1	0
（A）＋（B）	3	1
（A）＋（C）	2	0
（B）＋（C）	5	2
（A）＋（B）＋（C）	3	12
内（A）/（B）＋（C）	2	2
（B）/（A）＋（C）	1	0
（C）/（A）＋（B）	1	0
総数（人）	20	20

埼玉大学助教授・工博

NII-Electronic Library Service